
世界の表裏 BLACK or WHITE

清川 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の表裏 B L A C K o r W H I T E

【Nコード】

N 9 0 8 0 L

【作者名】

清川 流

【あらすじ】

ファンタジーなんて信じてなかった

毎日やりたいことだけやって

やりたくないことは適当にながして

それが俺ごくごくありふれた高校一年相沢祐一だ

だから俺はいまだに信じていない。

もう一つの世界とか炎や水を操れる能力とか
命がけの戦いとか

だから俺は信じていない

俺がそんなファンタジーの世界の主人公だなんて

二つの世界を舞台に繰り広げられるアクションファンタジー
始まります

世界の表裏

かつてこの世界は神がもたらした2つの要素からなりたっていた。

ひとつは世界に活力を与え導く《光の力》

ひとつは世界を育み見守る 《闇の力》

人々はそれぞれ《光の民》《闇の民》に別れ世界を支えまた世界に支えられえた。

しかしいつの頃からか2つの民は争い始め空を焼き、海を裂き、大地を喰らい

やがて世界の均衡が崩れ始めていった。

それを嘆いた神は告げた

『この哀れな世界を作りしは我、支えしは人、争いをもたらすは力。ならば新しい世界を、互いが交わることのない世界を』

神は世界を二つに分けその二つの片割れは《闇》の無い世界
そして《光》の無い世界となり新たな世界として生まれ変わり争いは終末を
迎えた。

なおも神は告げる

『許しておくれ、今度は我がそなた達を支えよう』

許しておくれ 我の子供達よ
『

第一章 非日常との邂逅 1

「以降二つの世界はお互いふれ合うことは出来なくなったという。」

「よし座っていいぞ相沢」

教壇に立つ教師のその一言で

「うーす」

と今まで朗読していた教科書を閉じ、相沢祐一は気だるそうに鵯^{とび}色の髪をかきながら席に腰を落とした。

昼前ということと席が窓際なので暖かな日光のせいで思わず欠伸が出そうになるがそれをなんとかかみころす。

頬杖をつきながら視線を教卓に向けると担任の社会科担当の中年教師が次に誰を当てるか視線を走らせていたが標的が決まったらしく。

「それじゃあ次のページを姫坂読んでみる」

「はい」

返事と共に紅い髪を肩で切り揃えた翠の瞳の少女、姫坂・ヒスカ・シヤステイルが立ち上がり朗読を始める。

（まあ無難な選択だよな、あいつ朗読上手いし）

そう考えながらなんとなく彼女に視線を移す。

「先述の神話《世界の表裏》は紀元前300年前に作られたものと言われておりその内容から古代の人々がいかに神々を始めとする神秘的な存在を尊重し……」

内容は先ほどの神話の解説文だがヒスカの朗読は先ほどの祐一の気だるいオーラが伝わってくるそれとはまるで違いクラスの誰もがその声に耳を傾けている。

「なおこの神話はその解釈に諸説あり本教科書に掲載されているものもつともし有力とされている、終わりです。」

教科書を閉じ席に腰を下ろすヒスカ、その動作もどこか優雅に見える。

「よし、いま姫坂が読んだようにこの神話については教科書に掲載されているものもつとも有力とされているが俺はそうは想わない
なぜなら……」

（あゝあまた始まった、岩崎の熱血自論解説、こんな眠くなる授業
昼前にもってくんやよ）

高校に入学して一週間、この授業もわずか二回目だがどうもこの
教師の熱血ぶりは性に合わない。

どうせ聞く気は無かったので頬杖をつきながら祐一は

（起きるころには終わってんだろ今日は午前授業だしこの後はゲー
センにでも寄ってくか）

などと考えながら眠りに落ちることにした。

第一章 非日常との邂逅2

放課後（と言っても午前授業だったので時刻は12時を少し過ぎたところ）

相沢祐一は校門をくぐり帰路につこうとしていた。

彼の通う《私立聖学院高等学校》は都心の中心部にありながら校庭、体育館、

さらには分校舎まで所有する大規模な高校である。

そのため校舎の周りにはコンビニ、本屋、ファーストフード店など学生に

とってありがたい店が並んでおり、10分も歩けば繁華街にでるところができるので

放課後は街で遊んで帰る生徒も多い。

祐一も（ゲーセンにでも寄るか）と考え繁華街へ向かっている。

先ほど授業中に

昼寝したせいかな少し頭が冴えないが少し歩いてれば覚めるだろう、そんなこと

を考えていると、「祐一ー！ー！ー！」と盛大な叫び声と共に誰かが後ろから

こちらに駆けてきていた、振り替えるとそこには。

「もー、ハアなんで先にハア帰っちゃうのよ！ー！」

「お前こそ道の真ん中で人の名前を大声で叫ぶな」

肩で息をしている姫坂・ヒスカ・シャスティールの姿があった。

「だってそうしないと祐一気がつかないじゃない」

そう文句を言いながら走ったことで乱れた髪と制服を直していくヒスカ。

「はあ、そんでお前なんの用？合唱部のほうは良いのか。」

「今日は休み、そんなことよりも。」

「なんだよ。」

どうせ大したことじゃないだろと考えながら相手の顔を見ると。

「祐一。」怒っていた、声は静かだが確実に。

「岩崎先生の授業中寝てたでしょ」

「お前、そんなことのためにわざわざ走ってきたのか？」

「当たり前でしょ！」先程と違い今度は大声で叫んでくる。

（はあ、また始まったヒス力のおせっかい）

こうなると話が済むまで帰してくれないのは昔からわかっている
ので。

「あのさ、俺もう家に帰りたいから。」

とヒス力を無視して歩き始めることにした。

「あ、ちよつとまちなさいよ」

ヒス力も後から追いかけて横に並ぶ。

（こいつに絡まれたらゲーセン寄れそうにないな。）

本日の予定を諦めると今度はどうやってこの小五月蠅い幼馴染
を退けるか考えることにした。

「だいたいなんで高校に入ってから神話やら教師の自論やら聞かされなきゃなんねーんだよ、それにこの制服だってブレザーなのになんで白なんだよ、フツー黒か紺だろ。」

そうぼやきながらヒス力の制服を指差し話題をずらすとするが。
「たった一週間でよくそんなに文句がでるね制服の色くらい我慢しなよ、それに祐一、約束したよね？高校入ったら真面目に授業受けるって、受けるから受験勉強手伝ってくれて。」

「それは…」

「真面目にやるって言うから手伝ったのにたった1週間で破ったよね たった1週間で！！」

「いやだからそれは。」昔からこうなると彼女は止まらないことを祐一はよく理解していた。

学校ではその整った顔立ちとスレンダーな体つきから男子の人気は高く女子に関しては元来の積極的な性格からすでにほぼ全員と友人になっただけなく名実ともに彼女はクラスの中心になってる。さら

には高校側から是非入学してほしいと誘いを受けるほど中学時代から合唱部で活躍していたためヒスカのファンは2、3学年にいてもおり声をかけられるなど校内で彼女を知らない生徒はいないほどだった。しかし学校以外、とくに祐一に関しては祐一曰く『お節介』だった。受験のときなど

「祐一が寝坊しないように今日は家に泊まること」と無理やり泊まらされたそうにもなった事がある。

（今日もこれに付き合わされるのか）

恐らく家に着くまでこのお節介な説教は続くだろう。まだ逃げるチャンスはあるかと少しばかり考えていたが今回は理由が自分だけに逃げられそうもない。

「ねえ聞いているの！」

「きいてるきいてる。」

そんなやりとりをしながら（しゃーないから今日はこいつに付き合つか）と逃げることを完全に諦め家路につくことにした。

第一章 非日常との邂逅3

「ちょっと祐一聞いている！」

「きいてるきいてる。」 今日はいったいどのくらいこのやり取りを繰り返しただろう、少し呆れながら箸を進める祐一。おかずのひじき入りハンバーグを一口サイズに切り白米の上に乗せてかきこむと丁度茶碗の中身が空になる。

「祐一君おかわりいる？」

「ちよつと祐一聞いている！」

「きいてるきいてる。」 今日はいったいどのくらいこのやり取りを繰り返しただろう、少し呆れながら箸を進める祐一。おかずのひじき入りハンバーグを一口サイズに切り白米の上に乗せてかきこむと丁度茶碗の中身が空になる。

「祐一君おかわりいる？」

「あ、はい頂きます。」

「もうお母さんこんなのおかわりなんて出さなくていいよ！」

祐一の正面の席に座っているヒスカの威勢の良い声がフローリングのマンションに響く。現在祐一達はヒスカの自宅キッチンで夕食を摂っている。

「ヒスカそんな事いわないの、ごめんね祐一君いつもいつもうるさくて。」

空の茶碗を受け取ながら流暢な日本語でヒスカの母親、姫坂ペトラは少し困ったようにヒスかをなだめる。ジーンズとクリーム色のセーターと地味とも見える服装だがヒスカと同じ翠の瞳と紅いロングヘア。そしてシャープな顔つきから誰しもから美人と言われる美貌の持ち主だ。

瞳と髪の色からわかるようにれっきとした海外の出身なのだが普段の言葉遣い、今日の夕食のメニュー（ひじき入りハンバーグ、大根の味噌汁、小鉢でほうれん草のお浸し）をみても。

（いつ見てもペトラさんの感性って丸つきり日本人だよな）　と祐一は思っていた。

ぼんやりそんなことを考えてると左斜め前から茶碗が差し出される、それを受け取りながら

「ありがとうございますヒスカの方は慣れてるんで大丈夫っス」

そう答えると。

「なんですってー！！！」

正面の席から叫び声が飛んでくる。

「貴方は少し落ち着きなさいヒスカ」

「でも」

「でもヘチマありません」

「うう」

想わず椅子から飛び上がろうとしたがペトラになだめられ渋々黙ることにするヒスカ、黙りはしたがまだどこか釈然としならしくブツブツなにか呟いている。

（こいつ学校だとわりと静かだけど家だとうるさいんだよな）

そもそも何故祐一がヒスカと共に食事をしているかを説明するには少し時間を遡る。あの後ヒスカのお節介を聞きながら帰宅したはいが特にやることもないのでブレザーの上着を脱ぎネクタイを緩め自室のベッドで昼寝を始めると先程授業中寝たにも関わらず睡魔はすぐに襲ってきた。そのまま体を委ね気付けば時刻は7時半過ぎ、日は完全に沈んでいた。

現在祐一の両親は海外で仕事をしているため一戸建ての家には自分独り、夕食をどうするか悩んでいると携帯に着信履歴が残っているのに気付きそれを開くと留守電が入っており。

『もしもし姫坂です実はね少し夕飯を作りすぎちゃったからもし良かったら祐一君食べにこない？』

とペトラの誘いを受けて現在に至っている、幼馴染で両親が共働きという環境からペトラはたまにこうして食事に誘ってくれている。祐一にとってヒスカは小五月蠅いがペトラの料理は想わず店を開

けば繁盛するであろう腕前なので願ってもなかった。そして制服のままヒスカの自宅のマンションの一室を訪れ。

「何であんた制服のままなわけ。」

と私服のＴシャツと短パンに着替えたヒスカから例のごとくつ込まれてから同じような会話を繰り返しながら食事をすすめていた。最後のおかずを食べ終わりお茶で喉を潤しテーブルから立ち上がる。

「じゃあ今日はご馳走さまでした。」

「あら、もう少しゆっくりしていったら」

「いえ、今日はもう遅いしそれに……」

ヒスカに視線を向けながら。

「これ以上いたらまたヒスカに怒鳴られそうですから」

「なにーそれってどういう意味よ？」

「おおっとそういうわけで今日は退散させもらいまーす」

そう言いながらペトラに一度頭を下げてから玄関に退散することにする、後ろから。

「にげるなー」と怒鳴るヒスカの声と。

「またいらつしゃいねー」とペトラの声がする、その声を聞きながら靴を履き玄関のドアを開けもう一度「ごちそうさまでしたー」そう告げて祐一は姫坂家をあとにした。

1階のロビーを抜けて外に出ると春とはいえ少し肌寒い風が吹いている、時刻は9時3分と帰るのには丁度いい時間だ。

「明日は土曜だしなにすつかなー、とりあえず今日行けなかったゲーセンでも行つて……」

このとき祐一はまだ気付いていなかったマンションの屋上から自分を見据える瞳があったことに。

「あれが……」

セミロングのカラスの様な黒髪、胸元まで開いている薄い水色のワイシャツが風に揺らされ引き締まった胸板が間から見え下半身にはスーツのズボンを身に着けている。そして右手の人差し指には蒼

い線で文様が刻まれたシルバリングがはめられておりサングラスで見えにくいが鋭く細長い瞳が真っ直ぐに祐一を見据えている。

「相沢祐一この世界の> シャスマ<か……」

このとき祐一はまだ気付いていなかったその瞳こそが日常の終わりの証だったのだと。

第一章 非日常との邂逅 4

ヒスカの家から帰宅するにあたって祐一はマンションから少し離れた位置にある公園を突っ切ることにした。

彼の自宅は公園を出て目と鼻の先に有るので姫坂家に向かう時はいつも利用している。住宅街の中央に広がるその公園は子供が屋外で少しでも遊ぶ機会を増やせるようにと市が五十年程前に作ったものであり小学校の校庭程の広いスペースを保有している。

置いてある遊具も年代を感じさせるが定期的に整備されているらしくそこまで酷い損傷は見当たらない。日は落ちているが公園内に接地してある街灯と周囲の住宅から漏れる灯りのお陰で歩くのに十分はなかった。

（さつて今日は家帰ったらアレやってから寝つかなく）

ぼんやりといつも就寝前に行く日課について考えてながら公園内を進む祐一。だが公園の丁度中央に差し掛かった瞬間周囲に異変が起こった。

「あれ、どうしたんだ」

辺りを見渡す雄一。

「……明かりが、消えてる？」

それは突然だった。街灯も住宅から漏れる光も全て消え失せている。時刻は午後9時7分、寝付くにはまだ早い時間帯のはずだ。

「なんだ停電か？」

「知りたいかい」

不意に背後から声が掛けられる。振り返るとそこには男が一人立っていた、髪はカラスのように黒く夜だというのにサングラスを掛け地肌には胸元まで空いた水色のYシャツを下半身にはスーツのズボンを身に付けている。

「なんてことはない、ただこの空間を周囲から切り離しただけさ」
『空間を切り離す』男が淡々と口にしたその言葉を理解出来ない。

たまに公園周辺に現れると噂されている変質者だろうか。

「あんた何言つてんだ？ だいたい夜にそんなサングラスしてる奴に突然んなこと言われても訳わかんねーよ」

とりあえず男を指差しながら訪ねる。

「それもそうだな、いや失礼した確かにこちらの不手際だった」

口の端を少し歪めながら男は答えた。

「なら……」

男は右手をゆっくりと振り上げていき真上に向ける。何となく指を目で追うとその薬指がボンヤリと青く光っている。

「これならご理解頂けるかな」

雨も降っていないのにいきなり水が降ってきて髪と服を濡らしていく、何が起きたかわからなかった、いや正しくは信じられなかった。男の掌から大量の水が吹き出しそれが鞭のようにしなりながら祐一の足下の地面を挟り吹き飛ばしたのだ。

「僕は一定量の水分を操ることが出来る、川や湖は勿論、空気中や地面に含まれるものもね、残念ながら生物に含まれるものは無理なんだが。どうだい、手も触れずに水を操る能力があるなら空間を切り離す能力があっても不思議じゃないと思わないかい？」

男の声は先程から変わらず淡々としている、まるで今起きている事態が日常生活の一部であるかのように両手を広げながら語っている。

（なんなんだこいつ、ありえねえよこんなこと）

手足から血の気が退くのが、背中に冷たい物が流れるのがわかる、得体の知れない恐怖が襲ってくる、このままでは。

「さて……」

男が再び腕を振り上げ水が集まり始める。

「今度は君の能力を見せてもらおうかな」

現状を信じられなくてもこれだけは理解出来た。このままでは命を奪われる。

第一章 非日常との邂逅 5

わざと外している、先程からの男の攻撃を見ていて気付いた事だ。背中を向けて走っていても自分の足下を狙いそのせいでよろめいても追撃される事もなかった。

「アイツなにがしたいんだ、俺を殺すんじゃないのか!？」

体制を立て直しなんとか滑り台の影に隠れながら乱れた息を整えようとすると。

しかし極度の緊張と恐怖のせいで思うように息が落ち着けられない。

「本当になんなんだ、さつきから俺が逃げても追いかけてこないしアイツ本当に何が目的なんだ!？」

「どうした早く能力ちからを見せてくれないか？」

（チカラ？そういえばさつきも言ってたような、一体なんのことだ？もしかしてアイツがやつてるみたいに水を操ったりしてみろってことか、だったら…」

だとしたらやることは一つのみ祐一は滑り台から離れて男に近づいていく。足が震え吐き気が込み上げるがそれを押さえ込み相手を見据える。

「なんだ、ようやく能力を見せてくれるのかい」

「それなんだけど」

両手を挙げ降参の意思を示しながら。

「残念だけど俺にはアンタみないなチカラはないんだよね、水どころかその辺りの小石も動かせないしさ、だからもし俺にそんな魔法みたいな事期待してんなら悪いけど諦めてくんない？」

その言葉を聞いていた男に変化はなかった、先程と同じく祐一のこ

とを見据えている、だが：

『もういいだろ』

どこからともなく祐一でも男のものでもない声が聞こえてきた。再び男の周囲に水集まり始める。それをみた祐一はまた攻撃がくるか

と警戒したが水は祐一を襲うことはなく何かを形作っていく。
それは一匹の豹だった

『もついいだろう、ここまでやって目覚めないと言うことはこいつに素質はないという事だ』

男の傍らに佇みながら水で形作られ青白い光を放つ豹は語る。

『この様なヤツに構っていても時間の無駄だ次に行くぞ』

「しょうがない」

男はヤレヤレと溜め息をつく

「君はいつも自分勝手だねそれに短気だ、こっちにも考えがあるというのに」

『不服か』

「まあね、だけど時間がないのも確かだし今回は諦めるとしよう」
どうやら自分が馬鹿にされてるようだがこの流れだとなんとか解放してもらえたらとうと祐一は安堵する。

「いや、今回はすまなかったね、どうやらこちらの勘違いだったようだ」

「じゃあこのまま帰してもらえってことか」

ようやくこの馬鹿げた出来事から解放される、そう思ったが。

「あゝ、その事なただけ」

男が少し困り気味に口を開く。

「こっちとしてはこの能力をしってる人をそう簡単に返せないんだ」

「はっ？」

「だからチャンスをあげよう」

『ウオオオオオオオ』

豹が雄叫びを上げその姿を巨大な竜巻へと変えていく。

「今から現在の僕が使える能力全てを使って君を攻撃する、それに耐えられたら帰してあげよう」

「いやちよつと待てよ、んなもん無理に決まってるだろ！」

「ちなみに物影に隠れても無駄だよこの辺りにあるものじゃ防げな

いからさ」

「ふざけんな！」

叫び男を止めようとするが男は一向に耳を傾けない、再び焦りと恐怖が心の奥底から登ってくる。

（どうすんだよ、あんなのかわすのなんて無理だしアイツの言うとおり防ぐこともできないんじゃないやどうすれば）

「僕も出来れば殺したくはない、だから…」

男が手をゆっくり挙げていきその動きに合わせて竜巻も勢いをましていく。

「生き残ってくれよ！」

振り下ろされた腕に連なって竜巻が襲いかかってきた。

「うああああああ！」

一瞬で思考が奪われ頭が真っ白になる、目の前にある現実はまだひとつ。

（死ぬ、殺される！）

絶対な死、そして心が叫ぶのは。

（嫌だ、こんなところでこんなヤツに殺されてたまるかよ！）

生への足掻き。

絶対の現実と諦めきれない感情、相反する二つのものが心を埋め尽くしていく。

そんな中ふと自分の内側から声が聞こえた。

《生きたいか》

「なんだ！」

自分の胸が熱い、それに気付くと何故か恐怖が和らいだようだった。

《もう一度聞けど、お前は生きたいか》

「俺は…」

第一章 非日常との邂逅 6

「結局期待外れか」

呟かれたその言葉は誰の耳に入ることなかった。男の放った一撃は容赦なく祐一を襲い、今は視界を蒸発した水分が覆い隠している。

「やはり君の言ったとおり彼には素質はなかったようだね」

残念だ、と溜め息をつく男に対して再び己の姿たる豹を形作った水の獣はいぶかしげに答える。

《愚か者が周囲をよく見てみる》

「なに？」

相方に促され辺りを見渡すが辺りは水蒸気が包んでいるだけだ。

「水蒸気？」

ふと疑問に思う、自分は水分を水蒸気にするように操ってなどいないはずだ。

「この水蒸気は君が起こしたものかい？」

《違う》

「じゃあ一体誰が」

《決まっている》

前方を見据えている相方の視線を追うとその先から熱風が吹いてきて男の頬をなでる。

「これは」

《そう、奴等だ》

その瞬間に前方で爆発が起こり熱風が襲ってくる。爆風により水蒸気を取り払われ一人の少年が現れる。

少年、相沢祐一の体に傷は一つもなくその周囲は炎がうづまいていた。

「あれ、俺生きてるのか…うわぁ！」

閉じていた目を開き場違いなスットンキョな声を上げる祐一、確

かに自分が炎に囲まれていれば驚きもするだろう。

しかし驚きはしても不思議と恐怖は無かった、一言で言えば守られていると何故かそう想える何かがそれにはあった。

「まさかこのタイミングで目覚め、しかも僕の一撃を防ぎきっていたとはね、さらに自らだけでなく周囲への被害すらない、まったく驚かされる」

男の言葉通り攻撃を受けたはずの地面や遊具にも攻撃の痕跡は見当たらない。

「なんだっ たんだ、さっきの。急に声が聞こえてそれに答えて、そしてたら力を貸してくれるって」

《名を呼べ》

再び声が頭の中に響く

《我の名を》

「名前…」

知らない筈だ、声の主の名など。だが何故か一つの名が頭に浮かんでくる、その名は…。

「紅纏いし導く咆哮（フィリウス クロム フランジェスカ）！！」

少年の声に応え炎が舞い上がり踊り狂いその熱量に辺りが真昼のように照らさる。炎はその勢いを増していきやがて一つに収束し少年の傍らに降りてくる。

「あれが…」

ようやく見つけた、その光景を目の当たりにした男にはそれしかなかった。

「あれが…炎のシャスマー！！」

炎が弾け中から炎を纏った黒い狼があらわる。

《ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ》

狼の咆哮は夜空を切り裂きその場の空気を一瞬にして支配する。その姿はまさしく炎の化身だ。

「お前が…」

恐る恐る声をかける祐一。

「助けてくれたのか？」

《……》

狼は答えることはない、その代わりに聞こえてくるのは拍手だった。

「いや、恐れいったまさかこの土壇場で目覚めるだけでなくこれほどの能力ちからを持っていたとはね」

手を叩きながら相方の豹と共に男が近づいてくる。

「なんだよ、まだやるつもりか」

身構える祐一、それに合わせて狼が祐一の前に出る、まるで少年を守るように。

「やっぱし、お前が守ってくれたんだな」

《……》

やはり狼は応えない、しかしそれでも今の祐一には恐怖はなかった。

守ってもらえるそう確信出来たからだ。

しかし。

「大丈夫だ、僕は約束は守る主義でね、約束通り君は僕の渾身の一撃を防ぎ能力に目覚めた、今回はその勇氣に敬意を表して見逃してあげるさ、それに。」

次の瞬間身体に激痛が走り意識が遠のいていき祐一はそのまま地面に倒れてしまう。どうにかして身体を起こそうとするがどうしても起き上がれない。

「能力に目覚めたばかりだと身体が変化についていけず人によっては意識を失ってしまうんだよ、特に君みたいな強力な能力の持ち主はね。今はゆっくりと休むと良いよ」

「ちつ……くしょ」

その言葉を最後に祐一の意味は闇へと堕ちていった。

第一章 非日常との邂逅 6

「結局期待外れか」

呟かれたその言葉は誰の耳に入ることなかった。男の放った一撃は容赦なく祐一を襲い、今は視界を蒸発した水分が覆い隠している。

「やはり君の言ったとおり彼には素質はなかったようだね」

残念だ、と溜め息をつく男に対して再び己の姿たる豹を形作った水の獣はいぶかしげに答える。

《愚か者が周囲をよく見てみる》

「なに？」

相方に促され辺りを見渡すが辺りは水蒸気が包んでいるだけだ。

「水蒸気？」

ふと疑問に思う、自分は水分を水蒸気にするように操ってなどいないはずだ。

「この水蒸気は君が起こしたものかい？」

《違う》

「じゃあ一体誰が」

《決まっている》

前方を見据えている相方の視線を追うとその先から熱風が吹いてきて男の頬をなでる。

「これは」

《そう、奴等だ》

その瞬間に前方で爆発が起こり熱風が襲ってくる。爆風により水蒸気を取り払われ一人の少年が現れる。

少年、相沢祐一の体に傷は一つもなくその周囲は炎がうづまいていた。

「あれ、俺生きてるのか…うわぁ！」

閉じていた目を開き場違いなスットンキョな声を上げる祐一、確

かに自分が炎に囲まれていれば驚きもするだろう。

しかし驚きはしても不思議と恐怖は無かった、一言で言えば守られていると何故かそう想える何かがそれにはあった。

「まさかこのタイミングで目覚め、しかも僕の一撃を防ぎきっていたとはね、さらに自らだけでなく周囲への被害すらない、まったく驚かされる」

男の言葉通り攻撃を受けたはずの地面や遊具にも攻撃の痕跡は見当たらない。

「なんだっただ、さっきの。急に声が聞こえてそれに答えて、もしたら力を貸してくれるって」

《名を呼べ》

再び声が頭の中に響く

《我の名を》

「名前…」

知らない筈だ、声の主の名など。だが何故か一つの名が頭に浮かんでくる、その名は…。

「紅纏いし導く咆哮（フィリウス クロム フランジェスカ）！！」

少年の声に応え炎が舞い上がり踊り狂いその熱量に辺りが真昼のように照らさる。炎はその勢いを増していきやがて一つに収束し少年の傍らに降りてくる。

「あれが…」

ようやく見つけた、その光景を目の当たりにした男にはそれしかなかった。

「あれが…炎のシャスマー！！」

炎が弾け中から炎を纏った黒い狼があらわる。

《ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ》

狼の咆哮は夜空を切り裂きその場の空気を一瞬にして支配する。その姿はまさしく炎の化身だ。

「お前が…」

恐る恐る声をかける祐一。

「助けてくれたのか？」

《……》

狼は答えることはない、その代わりに聞こえてくるのは拍手だった。

「いや、恐れいったまさかこの土壇場で目覚めるだけでなくこれほどの能力ちからを持っていたとはね」

手を叩きながら相方の豹と共に男が近づいてくる。

「なんだよ、まだやるつもりか」

身構える祐一、それに合わせて狼が祐一の前に出る、まるで少年を守るように。

「やっぱし、お前が守ってくれたんだな」

《……》

やはり狼は応えない、しかしそれでも今の祐一には恐怖はなかった。

守ってもらえるそう確信出来たからだ。

しかし。

「大丈夫だ、僕は約束は守る主義でね、約束通り君は僕の渾身の一撃を防ぎ能力に目覚めた、今回はその勇氣に敬意を表して見逃してあげるさ、それに。」

次の瞬間身体に激痛が走り意識が遠のいていき祐一はそのまま地面に倒れてしまう。どうにかして身体を起こそうとするがどうしても起き上がれない。

「能力に目覚めたばかりだと身体が変化についていけず人によっては意識を失ってしまうんだよ、特に君みたいな強力な能力の持ち主はね。今はゆっくりと休むと良いよ」

「ちつ……くしょ」

その言葉を最後に祐一の意味は闇へと堕ちていった。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で1

ぼんやりと意思が戻り意識が覚醒していく。霞んでいた視界が晴れてゆき幾つかの染みがついた見慣れない天井が見えてきた。

「……ここ……ここは？」

「気付きましたか？」

首を少しずらすとそこには一人の女性看護師が祐一の顔を覗き込んでいた。看護師は柔らかに微笑むと。

「すぐに先生を呼んできますから、まだ安静にしていして下さいね」
そう告げて病室から出て行ってしまう。

（ここは病院なのか？）

状況を確認するため身体を起こそうとする、まだ少し頭痛がするがなんとか身体に力は入ってくれるようだ。

周囲を見渡すと見舞い客用のパイプ椅子に部屋の角には簡易の洗面所、そしてベッドの隣には有料式のテレビが置かれている。恐らく個室の病室なのだろう。そして今度は自分の状態を確認すると白を基調とした手術着の様なものに着替えさせられていた。

「……あの後どうなったんだ？」

頭痛のする頭を抱えて昨日の出来事を思い出そうとするがよく思い出せない。

「確かペトラさんに食事に誘われてそれで飯食わせて貰ってマンシヨンから出てそれから……あれ？」

何故だろう、上手く思い出せない。まるでその部分にだけ霧がかかったようだ。

「何があっただんだ……」

ぼんやりと考えているとドアがノックされ先程の看護師と無精髭を生やした中年の医者が入ってきた。とりあえず今は医者に自分の状況について聞くことにしよう。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で2

日曜の住宅街、時刻も10時少し過ぎということで皆外出しているのかいつもより静かな道を制服に着替えた祐一は歩いていた。

「やっぱし納得いかね」

あの後医者から説明された内容は正直納得がなかった。祐一は二日前の深夜に病院の玄関で行き倒れておりそこを今朝の看護師に発見されらしい。

昨日一日は文字通り死んだ様に寝ており今朝になってようやく目を覚ましたというわけだった。医者の話だと極度の疲労が原因らしく祐一が寝ている間に行った検査では得に異常はなかったので今朝の内に退院することになり現在にいたっている。

「そこまで疲れるような事した覚えはないしそもそも病院に行った記憶もないしな、だけどそれよりも」

貴重な休日を寝て過ごしてしまった。贅沢といえはそのとおりだが訳も分からず二連休が潰れてしまったのはやはり納得がいかない。

「はあ」

本日何度目か分からない溜め息が出てくる。まあ過ぎた事を気にしていてもしかたないと残りの一日をどう有意義に過ごすか思案しながら歩いて行くと我が家が見えてきた、そしてその前には。

「あれ、ヒス力か？」

「あつ」

祐一の声に反応して紅い髪と翠の瞳を持つ幼なじみがこちらを向く。どうやら我が家に用があるらしく赤いＴシャツと黒のスパッツと簡単な恰好をしている。

「遅い、どこいったの！」

「遅いって、別に待ち合わせしてたわけじゃ」

「しょうがないじゃない、昨日も家にいないし携帯も繋がらないし待たされたこっちの身にもなつてよ、それになんて制服なわけ？」

いつもどおり容赦なく畳み掛けてくるヒス力。

「まったく、それで何処行つてたのよ」

「ちよつと病院に」

ヤレヤレと答える祐一。

「病院つてどこか、悪いの？」

ヒス力の表情が僅かに曇る。

「あついやそのなんていうか」

（しまった）

『病院』それはヒス力を前に口にしてはならない言葉だった。普段は祐一に対して非常に『お節介』なヒス力だがこと病気に關しては元來の心配性のせいで沈みがちになってしまう。

（どうする！実は氣絶しているところを保護されたなんて言つたら余計に心配させちまうし）

なんとかごまかすために頭を働かせるが中々良い案が思い浮かばない。

「ねえ、ほんとに大丈夫なの祐一……」

ヒス力の表情が更に沈んでいく。それをみて焦つていく祐一。非常に氣まずい状況だ。

「え」とその、そうだお前何か俺に用あるんじゃないのか！？」

「えつ、うん、これ」

なんとか話題をそらせて祐一は安堵する。そしてヒス力が取り出した物は。

「生徒手帳？」

「この前来た時忘れてつたでしょ」

そついわれズボンのポケットを探るが確かに手帳は見当たらない。

「わざわざこれの為に？」

「だって無いと困るでしょ」

「まあ、そうだけど」

（コイツわざわざその為に来てくれたのか、別に週明けでも良か

っただけど)

いつものお節介が何故か今の祐一には嫌じゃなかった。一日中眠っていたせいで頭が晴れないからだろうか。

(このまま返しても気まずいしな……)

一拍の間考えてあるアイデアを思い付いたこれなら暇も潰せて一石二鳥だ。

「なあ、その、なんだこの後暇か？」

「えっと、うん一応」

いきなりの質問にキョトンとするヒスカ。

「じゃあさたまにはどっか遊びに行かね。」

「えっ、でも」

「大丈夫だってそれに日曜なのに家にこもってたらその方が体に悪いっつもの」

「でも……」

「いいから」

少し困惑気味のヒスカの声を祐一が遮る。どうやらそれを聞いてヒスカも諦めがついたようだ。

「ハア…わかった、そんなに言うなら付き合ってやりますか!!」

先程とうって変わりいつもの調子に戻る。とりあえず一安心だ。

「じゃあ準備もあるしとりあえず12時に駅前集合で」

「オッケー、遅れんじやないわよ」

集合場所と時間を決めてお互いはそれぞれの家に向かっていった。お互い少しだけ心を弾ませながら。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で3

「ちょっと早かったか」

腕時計で時刻を確認しながら祐一は呟く。

ヒスカと別れた後、とりあえず一日何も入れていなかった腹に冷蔵庫の余りを詰め込みシャワーで身体の汚れを落とすと私服のジーンズと薄ピンクのYシャツに着替えその上から黒のベストを羽織り髪を整える。少し時間に余裕が有ったが遅れでもしたら。

「遅い、自分から誘ったくせに！」

などと言われるのは目に見えるのでさっさと駅前に向かう事にした。

現在時刻は11時48分、太陽も燦々と降り注ぎ軽い日焼けでもしてしまいそうな陽気だ。

（さつてと今日は何処いくな、誘ったのは良いけど殆ど勢いだったからとくに考えてなかったし）

正直ヒスカと二人だけで出かけるのは小学校以来すなわち4年ぶりだ。子供の頃ならまだしも高校生ともなるとお互いそれぞれの趣味も明確な違いが出てく何処へ行くか思案しなくてはならない。

（とりあえず女子ってどういう所に行きたがるんだ、やっぱり服屋とか小物屋とかか？やべ、今更だけど何処行きや良いんだ？）

そうこう考えているうちに前方から待ち合わせの人物がやってきた。

「おまたせ」

軽く手を振りながらヒスカが近づいてくる。

その姿は先程とは違いヘソが出てしまう程度の黒の半袖シャツの上に白の半袖のジャケットを羽織りジーンズ生地の短めのスカート、そして背を少し高く魅せたいのかローヒールのサンダルを履いている。心なしか薄化粧しており先程よりも唇に光沢があり、そしてアクセントなのか胸元には銀のペンダントが光っている。

「どうかな？」

「どうかなって？」

想わず質問に質問で返してしまう。

「もう、久々の幼なじみの私服姿はどうですかって聞いてんの？」

腰を屈め下から覗き込みながらわざわざ質問内容を説明してくれるヒス力。

「ああ、そういうことか」

『うーん』と唸りながらジロジロ観察を始めると少し恥ずかしそうにヒス力は背をピンと伸ばす。

「そうだな、お前こんな恰好してたっけ？」

「なっ」

「ガキの頃はヘソなんか出してなかったしいつもジーパンだったろ、化粧なんかもしてなかったし」

「ちよつと、そんなの当たり前でしょ！」

突然噛みつかれて想わず後ろにさがってしまう。

「小学生の頃と今を比べるなバカ！」

何やらご立腹なご様子のヒス力。そのままフンと横を向いてしまった。

しまったと思ったが後の祭だ。

「わかった、わかった悪かったってほらこのとおり」

手を合わせて謝罪するが機嫌は治りそうにない。

「じゃあ今日一日はお前の好きな場所に行っていていいからさ」

「……本当でしょうね」

ジロリと視線だけ此方に向けて尋ねられる。正直かなり怖い。

「本当ほんつつつとうです、今日一日はお付き合います……！」

「……………」

「……………」

場が沈黙に包まれ周囲から。

「なんだなんだ」

「やだゝ別れ話」

「おっ、あの子かわい〜」

「男の方は冴えねえけどな」

などと囁きが聞こえてくる。

（だあゝ頼むからさっさと何処行くか決めてくれ!?!）

当然心の中で叫んでも相手に伝わることはなく周りの視線に耐えるしかないこの状況はあまり心地よいものでもない。

どうやらヒス力も周りの視線に気付いたらしく少し気まずそうにしていた。

「じゃあ行きたいところあるから着いてきて」

「あ、ああわかった」

歩きだしたヒス力の後を追って行く祐一。周囲からの視線から逃げられた安心感と今日一日どうなるのか不安感が脳内で混ざりあいなんとも複雑な気分だ。

「まあ、しゃーないか」

「なんか言った？」

「いやいや別に」

どうやら機嫌はまだ治ってないらしい。

さあこの後どうやってこの幼なじみを宥めるか頭を悩ませることになりそうだ。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で4

「よしもらい!!」

「うわ、ちょいまって!?」

「問答無用!とどめ!!」

激しい効果音が鳴り響き画面に「You Lose」と表示される。

「よし、これで5連勝!」

ガッツポーズを極めながら叫ぶのはお節介幼なじみのヒス力だ。あの周囲の視線から逃れた後連れられてきたのは地元でも少し古株のゲームセンター『グッドラック』だった。3階建の店内の1階には最新の機種が、それ以外にはいわゆるレトロゲームが並べられたその店内は学生よりも年忌のあるゲーマー達により賑わっている。いわゆる知る人ぞ知るマニアックゾーンだ。

「なに〜祐一いつつとも学校帰りにゲーセン寄ってくくせに大したことないじゃん。」「うるせえ、いつも違う店に行ってたんだよそもそもこんなのやったことね〜つの!」

わざわざ言葉を溜めてから嫌味つたらしく噛み付いてくるヒス力。(ちくしょ、むかつく〜コイツ)

今プレイしていたのは20年程前に流行った格闘ゲームだ。たまにゲーム好きな担任教師が授業を脱線して話てるのを聞いたことはあるもののプレイするのは初めてである。

「つーかこのゲームお前かなりやりこんでじゃねーのか!?!」

「あれ、ばれた?」

「あんなえげつねえコンボ使ってたら誰でも分かるつつの」

「いや〜この前たまたま友達に勧められてやってみたらハマっちゃつてさ、最近結構来てるんだよねこの店」

「そんでもって俺を力モリたかったと?」

「ありゃ、またばれた」

ペロリと軽く舌を出すヒス力。

（ちくしょうなんで学校だと真面目なくせに俺といるときはこんななんだよコイツ）

まさかあのヒス力に連れてこられたのがゲーセンでしかも一方的に力モれるなど考えもしなかったのでどんどんテンションが下がっていくが自分から今日一日付き合おうと宣言してしまったために文句の一つも言えない。

（ハア、やるせねえ）

そんなことを考えている間にヒス力は立ち上がり出口に向かっていく。

「おゝい、どこ行くんだ？」

ゲーム機に突っ伏しながら呼びかける。

「ちよつと早くしてよ次行くんだから」

「つぎ？」

「そつ、次、ほら早く早く！」

（はあゝ）

心の中で溜め息をつき。

「へいへい仰せのままに」

立ち上がりわざと行儀良く軽く頭を下げる。「んで、どこ行くんだ？」

「いいから着いてきて」

言われるままに着いていくことにした。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で5

ゲームセンターを出た後はCDショップでお互い好きなアーティストの新曲を探し、バツティングセンターで身体を動かして休憩がてら駅前のファーストフード店に立ち寄り現在は日も傾いてきたので帰路についていた。

「うーん楽しかった」

軽く伸びをしながらご満悦な表情のヒスカ。

「たまには体動かすのもいいよね」

「まあな」

「なに、不満でもあんの？」

「別に、結構楽しかったしさ」

「そつ良かった」

正直意外だった。てつきりやたらとファンシーな雑貨店や服屋に連れて行かれるとばかり思っていたので少し拍子抜けだった。今日のヒスカの行動は普段の自分とやけに酷似していたからだ。

（まさかコイツがこんな趣味だったなんてな、ガキの頃とあんまし変わってないな）

「でも良かった気晴らし出来たみたいで」

「へっ？」

思わず声が裏返ってしまう。

「なに変な声出してんの」

「だつてお前…」

ふとした疑問が頭を横切る。

「もしかして俺に合わせてくれてたのか？」「えつとその…」

心なしかヒスカの顔が赤い様な気がする。

「…だつて言ってたじゃん気晴らしに付き合えって」

「でも今日一日好きなところ行って良いって…」

「だから！」

言い終わる前に打ち切られる。

「好きな様にしたの、悪い!？」

いつもどおり早口で捲し立てて横を向いてしまっヒス力。

「……………」

啞然としてしまっ祐一、質問してしまったことに少し後悔してしまった。

「あゝその…なんつーか」

頬を少し掻きながら。

「…その、サンキューな」

それだけ伝える。

「…感謝しろ」

呟かれたその一言を最後に会話が途切れる。だがそれは決して不快なものではなく不思議と心地よいものだった。

しかし。

「やあ」

後ろから聞こえたその一言でその空気が破られた。

「奇遇だねこんな所で会うなんて」

振り向くと一人の男が此方に向かって歩いてくる。

髪はカラスの様な黒のセミロングで黒のサングラスを掛けている、胸元まで開いた水色のYシャツを地肌に直接身に付けているため引き締まった胸元が隙間から見えていて下半身にはスーツのズボンを履いている。

(…誰だ?)

「すみません、誰ですか？」

「ちよつと祐一失礼じゃない知り合いなんですよ」

「んなこと言われても」

「すみません、コイツ口が悪くって」

「おい」

自分の代わりに謝りついでに口の悪さを指摘されヒス力に突っ込んでしまっ。

「おいおい悲しいなー 昨日会ったばかりじゃないか」

「だからあんた誰…」 「祐一君」

名前を呼ばれた瞬間頭に何かビジョンが浮かんできた。

夜の公園、辺りから明かりが消え男が近づいてくる『能力を魅せ^{ちから}てくれないか？』

男の手から水が吹き出しそれが襲ってくる。それを吹き飛ばす自分を護る炎そして。

『紅纏いし導く咆哮（フィリウス クロム フランジェス力）！！』

何かの名前を叫ぶ自分、現れる一匹の狼。

そして。

「うつ…」

足下がぐらつきよろめいてしまう。

「アンタは…」

「思い出したかい？」

思い出した、思い出してしまった。忘れていた知りたかったはずの現実を。

「ちよつと大丈夫なの」

ヒス力が心配そうな顔で覗き込んでくる。

「あつああ、ちよつと暑さにやられただけだ」

「おやそれはいけないだったらそこに行き着けの店があるから一昨日のお礼に少しそこで休んでいくと良い、どうだい？」

「アンタなに言って…」

「お願いします」

自分が返事をする前にヒス力が答える。

「おま、何言って…」

「だって今朝も病院に行ってたんでしょ今は休んだほうが良いよ、それにこの人もお礼したいっていつてるし何があったか知らないけどこういう時は善意に甘えてもいいと思う」

「いや、だけど」

「祐一」

じつと目を見つめられる。どうやらいつものお節介が出てしまったようだ。こうなつては諦めるしかない。

「はあ、分かった。そんなかしついてくんなよ」

「わかつてる、そこまで図々しくないって」

くるりと男に身体を向けるヒス力。

「それじゃコイツのことよろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる。

「ああお任せを、彼にはお世話になったからねたっぷりお返しさせてもらうさ」

「そんな気をつかわなくてもコイツなんて水でも十分ですよ」

「てめ、ふざけんなこちとら一応病人だつつの！」

「じゃっバイバイ」

逃げる様にその場を去つて行くヒス力。

「たくつ」

（さっきまで少し見直していたのにヒス力はヒス力いつもどおりかよ）

「さあそれじゃ僕達も行こうか」

「……ああ」

男に促され先程の道を歩き始める。

「彼女元気な子だね、恋人かい？」

「そんなんじゃないよ」

素っ気なく返事をする。今は他に考えることがある。

（どうするどうやってコイツから逃げる、ここは駅前だしこんなに人がいたら多分あの変な力は使えないだろうしだったらチャンスはあるとりあえずその路地に逃げ込んで）

「そうそう」

男が小声で話しかけてくる。

「逃げるとか考えないほうが良いよ、もしそんなことをしたらそうだな…とりあえずその広場は消えてしまつたろっね」

「てめっ……」

思わず声を荒げてしまいそうになるがなんとか抑える。

「大丈夫、君が僕に付き合ってくれさえすれば何も起きないさ何もね……」

「……わかった、相手してやるから何もすんなよ」

「もちろん」

（ちくしょう、これじゃ逃げらんねえか。しょうがなねえ今は様子を見るしかないか）

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で6

男に連れられて歩いている道には見覚えがあつた。街路樹が立ち並びコンビニや書店など学生にとって有り難い店が軒を連ねるその道は。

（ここ通学路だよな）

祐一の通う高校へ続いている道だ。このまま真っ直ぐ進めば10分ほどで到着するだろう。

（まさか学校で俺にあの力を使わせる気が…）

確かに今日は休日なので人はいない、そしてこの辺りで広いスペースがあり後始末が容易に出来る場所としては校庭は打ってつけだろう。

（どうすんだよあんな力使い方なんて分からねえし使えなかったら何されるか分かったもんじゃねえ）

心拍数が上がり背中に冷や汗が流れる。

「何処に行くんだいもう着いたよ」

男の声で我にかえる。どうやら目的地に着いたらしくそれに気付かず行き過ぎたようだ。

「ようこそ」

そこは。

「僕の店へ」

うやうやしくお辞儀をしながら男が木製のドアを開けドア上部に取り付けられた鈴が音を立てる。『Blue Moon』と書かれた看板が掲げられたその店は喫茶店だった。

「喫茶店：なんでだそれに今自分の店だつて？」

「言っただろう一昨日のお礼をするってさあ入ってくれ」

男に促され警戒しながらも店に踏み入る。内装は道に面したかぜがガラス張りになっている以外は全て木製で席もカウンターが5つ四人かけのテーブル席が2つとこじんまりしておりスピーカーから

流れるジャズがどこか懐かしい気分させる。

「さて飲み物は何か良い？今のお勧めは…そうだなアイスラテなんてどうだい、なかなか良い牛乳と豆が入ったんでね」

「それでいい…」

「ふふ、分かった好きな所に座ってくれてかまわない」

壁際のテーブル席にすわることにする、気休めだがカウンター席よりは何かあったときに易いだろう。

（本当に何考えてんだアイツ）

男の方は紺色のエプロンを身に付けコーヒーを淹れているその姿はどこから見ても喫茶店のマスターだ。

（まさか本当に茶をおごってくれるだけ……んな訳ないよな）

「お待たせしましたアイスラテになります」

目の前にアイスラテが置かれる。

「どうしたんだい何か考え事かな」

「別にそんなんじゃない」

「そうか、それじゃ僕も相席させてもらうよ」

自分の分のアイスラテをテーブルに置きエプロンを椅子に掛けてから祐一の向かいに男は座る。

「自信作なんだ早く飲んでみてくれないかい」

「……………」

「どうかした？」

「お前のと取り替えるよ」

「なぜ？」

「毒でも入ってたら困る、さすがに自分には入れないだろ」

「まったく要心深いね君は」

お互いの飲み物を交換する。

「これで良いかい？」「ああ、それじゃ…」

「まった、質問するなら先に飲んでからにしてくれ」

「…わかった」

グラスに口をつけ少し口に含む牛乳の濃厚な甘みとコーヒーの香

ばしさが混ざりあい口一杯に広がる。

「美味い」

「それは良かった」

男も自分の分には口をつける。

「それじゃあ本題に入ろうか何か聞きたいことはあるかい？」

「…あの力」

まずはそこからだ。

「いったいなんなんだあれ、いきなり水が襲ってきたり俺の体から火がでたり」

「ふむ、やはりそこか話すと長くなるが…」「話せ」

男を睨みつけ催促する。

「…それじゃあまず君は『世界の表裏』という神話をしっているかな」

「あれだろ神様が世界を二つに分けたっていう学校で習うやつ」

「その通り、それじゃあそれがもし事実だとしたら」

「……はい？」

「そして君には神話に登場する光の力が宿っていると言ったら君はしんじるかい」

「あの神話が実話…」男は胸ポケットからなにかを取り出した、銀貨だ。

「かつて世界は一つだった。しかし遙か昔争いが続き世界は二つに分けられ今はお互い触れ合うことはできなくなっているこのコインの表と裏のようにね」

男はコインを指で弾きそれを空中でキャッチする。

「だが2000年程前に問題が発生してね、二つの世界のバランスが崩れ始めたんだ世界は二つに分かれてもお互いが支え合う形で存在していただからどちらがかけても世界は消えるまさしくコインさ」

ラテを口を含む先程と違い味を感じない。少し頭の中を整理するつもりでもう一口含む。

「具体的にはこちらの世界つまり光の世界の力が弱り始めている、そのせいで本来ならこの世界にないはずの夜が現れ最近では徐々にその時間帯も長くなっている。そこで君に協力してほしいのさ世界のバランスを保つ為に光の能力ちからを持つ君に僕達闇の民はね」

「闇の民……」

一瞬考えそして疑問が浮かぶ。

「ちよつと待てよそれじゃああんたもう一つの、闇の世界から来たつていうのか!？」

「そのとおりある一定の条件を満たせば世界を行き来することなんか可能さ、まあそれなりの代償は支払うけどね」

「……………」

沈黙が流れる。

「…そうだよな、アンタは無茶苦茶なことしか言わないよな」

机に手を叩きつけ再び男を睨みつける。

「ふざけんなもつと真面目に話せよ確かにこの前の夜あんな訳わかんねえもんみせられたけどなそれでも無茶苦茶だ!!」

「それでも事実だ」

男のこえは先程とかわらず飄々としている。

「今僕が話した紛れもない現実さ、信じる信じないかは君次第さ」
奥歯を噛み締め自分落ち着けとに言い聞かせる。

「じゃあそれが本当だとして俺はどうすれば良いんだ」

「簡単さ仲間探しを手伝ってほしいそれだけだ」

「仲間？」

「そう、君達光の民の能力をシャスマ僕達闇の民の能力をファルマと呼ぶ」

「シャスマ……」

この男に襲われた時に自分を護ってくれた力のことを思い出す。
「それぞれの能力は4つの属性に分岐する、シャスマは炎、風、雷
ファルマは水、木、土そしてそれぞれを統括するのが光と闇だ君にはそれらを扱える人間を探すのを手伝ってもらいたいんだ」

「そんなことしてなんになるんだ俺を巻き込むな!!」

再び机を殴りつける。

「別に無理にとは言わないよ、君には頼もしい護神ごしんがいるしね」

「ゴシン?」

「あの時に君を助けたあの狼さ、能力は自らを象徴する姿をとることがあるそれが護神」「あぁつくそもう訳分かんねえ!」

こめかみを抑えて深呼吸するが落ち着く気配はない。

「確かに今すぐは理解出来ないだろうね、今日はもう帰ると良しさそしてよく考えてみることに気が向いたらここへ連絡してくれ」

男が名刺を差し出すそこには『Blue Moon店長 榊原

霞』と電話番号が書かれていた。

「ちっ!」

名刺をむしりとり席を立ち上がる。

「おつと残さないでくれよ自信作なんだから」

「ッ!?!」

グラスを掴み中身を一気に飲みほしグラスを机に叩きつけ店の出入口に向かう。

「いいか俺は絶対にお前に協力なんかしないからな」

ドアを乱暴開けそのまま出ていく冷たい夜風が吹いてくるが今はそれも気にならない。

今は何も考えられなかった。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で7

昼間とうって変わり冷たい夜風が住宅街を吹き抜け身体に突き刺さる。喫茶店を出てもうどれぐらい歩いただろうか、普段通っている道なのに頭が空回りよく分からない。

「……ちっ」

近くにあった空き缶を蹴ると高い音が夜空に響く。

「ほんと、訳わかんね…」

家に着いたら少しは落ち着くだろう。

しかし…。

「おわっ!？」

突然足下に青白い何かが走り煙が上がる。

「ありや外しちやった」

正面から誰かが近づいてくる。

「やっぱ暗いと狙い難いね〜でも近づけば当たるかな?」

暗闇から出て来たのはニット帽を深く被りパーカーを着た若者だった。

「なんだよお前…」

「ん〜誰でもいいじゃんだって君死ぬんだし」

「ッ!？」

「おいで〜臆病な野心クルッブラー」

再び青白い何かが光何かを形作るそれは雷で作らたトカゲだ。

《くるるるる、今回の獲物はコツイ?喰っていいの?》

(アイツまさか!)

「能力者…」

「ん〜今頃気付いた?」

若者とトカゲが身構える。

「じゃあ謎も解けたし〜バイバ〜イ」

同時に祐一に向かって突っ込んでくる。

「ッ!？」

後ろに跳んでそれを避けるがそのまま倒れこんでしまいすぐさま体制を立て直す。

「ハアハアなにすんだ!！」

「んゝだから君を殺すって…」

「何でだよ!！」

相手を睨みつけ叫ぶ。

「お前のそれ雷だろだったらお前もこっちの世界の人間だろなんで俺を狙うんだ!！」

「うゝんだってそれが僕の仕事だしさゝ死にたくないなら君も能力ちから使ったら?」

《そゝそゝ使ったらゝ》

再び相手が身構える。

（使えって言ってもどうすりゃ使えんだよ）

「それじゃ」

若者とトカゲの雰囲気が変わる。

「死ね」

トカゲが雷を放ち若者がそれを纏い鋭い突きを繰り出してくる。その速度は速く避けられない。

「うわあ!？」

（ふざけんなこんなとこで死んでたまるかよ!）

鼓動が高鳴る呼吸が速まり額に汗が吹き出すそして。

《生きたいか》

声が聴こえる。

《お前は生きたいか》

「俺は…」

その声に応える。

「俺は生きたい!」

《ならば力を貸そう》

次の瞬間若者が吹き飛び派手に転がりうめき声を上げる。

「これって…」

炎が祐一を囲んでいる、まるで彼を護るように。

《名を呼べ我の名を》

「名前…」

天を仰ぎ力強く叫ぶ。

「紅纏いし導く咆哮（ファイリウス クロム フランジェスカ）！！」

炎がそれに応え収束していき中から一匹の狼が現れる。炎に焼かれた黒炭のような光沢のある毛並に燃え盛る炎を纏った炎の化身だ。

「お前来てくれたのか！」

《……》

狼は答えない。

「相変わらず無口だな、まあいいや今は…」若者とトカゲが起き上がる。その瞳は。

「痛って…」

殺気に満ちていた。

「痛えぞこらアアアアアアアアアアア」

雷が周囲を焦がし嫌な匂いが立ち込める。

「殺す！目ん玉くり貫いて腕をばらして腹綿引き抜いて殺してやる！！」

《喰って喰って喰い尽くしてやる！！》

「へっ、やってみるよ」

やはりそうだ前と同じくファイリウスがいるだけで恐怖が消えていく。

「デメエなんかに負けるかよ！！」

必ず勝てる、そう確信出来た。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で8

《シャッ！》

《グオオオオオオオ》

黒き狼と雷いかずちのトカゲが空中で交差し空気が震える、狼が牙を突き出せばトカゲはそれを避け雷を放つ、しかし狼はものともせず猛攻を繰り返す。

「うおおおおおおお！！！」

祐一も拳を硬く握りニット帽の男に殴りかかる。拳は掠りもすることなくかわされ続けるががむしゃらに拳を振るい続ける。

だが…

「うぐッ！」

相手の膝蹴りが脇腹に決まり悶絶してしまう。更にそこへ鋭い爪が襲い腕を肩を頬の皮膚を薄く裂かれ血が薄く滲む。

追撃されると思ったがニット帽は祐一から距離をとりそして。

「……おい臆病な野心クラッブラーな野心デメエ手え抜いてんじゃねえしっからこつちに能力を超越しやがれ！！！」
ちから

ニット帽が手を振るうと小さい火花が散り僅かに辺りを照らす。

「こんなんじや皮をひん剥くことも出来やしねえ！！！」

《煩せえ！さつきからこの犬っころが厄介なんだよ！！》

「だったらアレやんぞ、さっさとこつち来い！」

《チッ》

《グオオオオオオオ》

逃がすまいと狼が口から炎を放ちトカゲに直撃し焼きつくしていく。

《ギャバババゲゲゲ》

吐き気を催す汚らしい叫びと物が焼ける匂いが立ち込めていく。

（やったのか…）

しかし上体を起こし祐一が見たものは傷一つなくニット帽の傍ら

に佇むトカゲの姿だ。ただ尻尾が切り取られたように無くなっている。

「そんな、フィリウスが倒したはずじゃ」

《ゲゲゲゲ知りたいか、ん、知りたいか？ だったら教えてやんよトカゲってのはな殺られ そうになると自分の尻尾を切り落としてでも生き残ろうとすんだよだからな…》

「コイツは尾があれば何度殺られても死なねえんだよまったく臆病なヤツだぜっ」

《ウルセえ、テメエのせいでコチトラ尻尾全部使っちゃったんだぞ！》

トカゲがニット帽を睨みつける。

《たくつ尻尾全部使わなきゃ再生出来ない威力なんて聞いてねえぞ、いいかあの犬ところだけは喰わせろよ》

「ああああ解ったからさっさとアレやれよ」

《ケツ！》

「何をする気なんだ」

《立て》

狼が祐一の前に降りてくる。

《くるぞ》

「臆病な野心に潜は食らいつく牙…」

トカゲが光を増してゆきニット帽の身体と同化してゆく。

「こい（イータ）！」

「ゲエエエエエ！」

またしても汚らしい叫びを上げてトカゲが消えていきニット帽の両手に何かが現れていく。

それは禍々しい一対のナイフでニット帽の身体から溢れる電撃に反応しているのか金色に光っている。

「あれは…？」

《契約》

狼が答える。

《シャスマと護神が真の意味で魂を一つにした証だ》

「魂を一つに、そんな事が…」

《護神は自らの認めた者が自身の魂の名を呼んだとき魂の形を具現化した姿となりその者に力の全てを貸し与えるそれが…》

「契約か」

立ち上がりながら答える。

「なにごちゃごちゃ喋ってんだあ！」

「ッ！！」

ニット帽がナイフを構え切り込んできた。そのナイフが僅かに触れるだけでコンクリートの壁が抉られていく人体が受ければまず助からないであろう威力だ。

《ウオオオオオオオオ》

狼がそれを向かえ打つ。

だが…

《グォ！！》

ニット帽の横薙ぎの一撃で吹き飛ばされコンクリートの壁に激突してしまう。

「フィリウス！？」

信じられなかった。あれほど強く自分を護ってくれていた存在がたったの一撃で倒されたからだ。

「シャアアアアアアアア」

再びニット帽が突っ込んでくる。その切っ先が狙うのは祐一の首だ。

「うわぁ！」

《喰わせろおおお》

ナイフへと姿を変えたトカゲの叫びも何処からか聞こえてくる。

動けない、かわせない、勇気など微塵も残っていない。あの時と同じだ榊原 霞に襲われた時と同じ様に恐怖が心を支配していく。

ナイフが祐一のど元を捕らえた。だが…

「ウギヤアアアアアアアア」

悲鳴を上げたのは祐一ではなくニット帽の男だった。よくみると弱々しい炎がニット帽の手首を焼き焦がしている。

《ふざけるな》

そして聞こえてくるのは黒き狼の呆れかえった台詞。

《我の主はまさかここまで腑抜けだったとはな》

「フィリウス…」

《お前は生きたいと願っただからこそ我は現れたお前の願いを叶えるために、だがもういい》

狼は立ち上がり身構える。

《やつは我一人でやるお前は何処かに隠れている》

「…くっ」

なにも言い返せなかった。生きたいと願いながら死を覚悟してしまった。護られていると安心しきっていた。

「俺は…」

「テメエだ…」

ニット帽が再びナイフを構える手首の炎はもう消えていた。

「テメエから先に殺ってやる、覚悟しろ糞犬ウラアア！」

《グオオ》

ニット帽のナイフが正確に狼の急所を捉えていく。その度に炎を吐き出し迎撃しようとするがそれも相手の雷に塞がれる。

「フィリウス、アイツもしかして」

先程と比べ狼の動きはどこかぎこちない。

「さっき壁にブツカタタときのダメージが残ってるんじゃない」

「死ねえ！」

ニット帽が遂に狼の動きを捕らえ雷が畳み掛ける。

「フィリウス、死ぬなあああああ」

咄嗟に叫び走りだす相棒を助ける為に、もう一度伝えるために『生きたい』とそして。

《喰い殺す！》

「しゃあああああ！」

手を伸ばすそして…

「俺も一緒に戦うだから！」

思いの丈をぶつける。

「死ぬなフィリウスウウウウウウウウ！」

辺りに声が響く何よりも強い魂の咆哮が。

《呼べ！》

「フィリウス…」

《その意志に偽りなければ呼べ我の魂の名を！》

「遅えええええ」

ニット帽の雷撃が狼に落ち辺りを焼きつくす。近くの家を砕き地面を抉り後にはなにも残らない。

《おいおいまだ喰い足りねえぞ》

「くひっ」

ニット帽の頬が吊り上がる。

「くひやややややなんだこの程度かツマンねえツマンねえな、おい！？」

それは下品な笑いだ。

「何が一緒に戦うだ、魂の名を呼べだ？バカじゃねえのだったら聞かせてみるよ…」風が 吹き荒れたそれもただの風ではなく熱風が。

「へっ？」

《誰が殺られたと？》

「はっ？」

ニット帽に包まれた頭に直接声が響いてくる。

「そんなに俺の相棒の名前が聞きたいなら聞かせてやる」

今度は低い祐一の声が耳に響く。

祐一は大きく息を吸い込むと放った。

「咆哮が導くは全ての終焉…」

『魂の名』を。

「火具^{かぐら}楽^ら!!」

祐一の周囲に炎が渦巻く、それが集まり祐一の目の前に一本の火柱が産まれその中から何かが出てくる。

それは柄から刀身までまるで炎に焼かれた黒炭のような光沢の黒い日本刀だ。

「これが…」

日本刀を手にとる。

「フィリウスの魂の形」

その刀身からは常に熱が放たれ持っているだけで体力を奪われる。

(熱い、だけど持つてると心強いそれに)

火具楽を中段に構える。

「これで俺も戦える!」

「なぐにが戦えるだ」ニット帽が近づいてくる。

「だったらその魂の形とやらを…」

ニット帽子が一気に踏み込んでくる。

「ぶっ壊してやらあ!」

《食いつくしてやるう!》

肩と腕に力がある、一体どうやって対処する。

(避けるかそれとも…)

《振るえ!》

「フィリウス!」

《前に進むなら我を振るえ、さすれば道は開かれる!」

「…ああ、わかったお前を信じる!」

火具楽を上段に構え直しニット帽を見据える。今心にあるのは恐怖ではなく。

「くらえ!」

前に進む勇氣だ。

刀身を振るうと同時刀身から炎が放たれる。その量はビル一つくらい軽く吹き飛ばしてしまいそうだ。そして炎は全てを飲み込んでいった。

第二章 近しい異常と遠き日常の狭間で9

火具^{かぐら}楽から放たれた炎が辺りを埋めつくしていく。それは空を焼き大地を喰らい勢いを増してゆき後に残ったのは無惨にも焼きつくされた建物の残骸だ。

「俺は…」

その光景を目の当たりにして気が狂いそうになる、何故ならこの光景を創り出したのは『相沢祐一』、即ち自らだからだ。

「うぷっ」

火具楽を地面に突き立て片膝をつき吐き気が込み上げるがそれを抑え込む。それでも恐怖は消えない。

「俺、殺しちまったのかあのトカゲ野郎を…」

人を殺したという恐怖は消えない。

「俺は…」

そして殺したのはニット帽の男だけではない。壊された家に住んでいたであろう多くの人々をその手にかけてしまった。

「これが現実さ」

聞いたことのある声が後ろから迫ってくる。

「この日常では有り得ないこの光景こそが今の君の現実なんだよ」

「あんたか…」

振り返らなくても判る近づいてくる人物は。

「榊原 霞だっけ」

力なく祐一は呟く。

「ふふ、覚えて貰えて光栄だよ」

「何しに来たんだよ」

「酷いな君以外のシャスマの能力^{ちから}を感じて来てみたら君が榊原つてだから結界を張ってあげたのに」

男がわざとらしく溜め息をついた。

「結界…」

その言葉の意味を理解するのに一瞬時間を要した。結界が張ってあった、つまり空間が切り離されている。

「…皆死んでないのか？」

「そのとおり」

「そっか、でもあのトカゲ野郎は…」

「彼ならここにいるけど」

「なっ!？」

榊原の台詞に反応して膝をついたまま後ろを振り返る。そこには二ツト帽の男を肩に担いだ榊原が立っていた。

「そいつ!」

「君の一撃が当たる前に助け出したんだよ、そのかわり気を失って貰ったけどね、つまり君は誰も殺していないのさ」

「……」

先程の恐怖が消えていくかわりに身体から力が抜け尻餅についてしまうが今は気にならない、今あるのはただ安堵だけだ。

「だけど…」

しかしその安堵感を榊原の声が遮る。

「さっき言った様に只の住宅街を一瞬にしてこんな無惨な姿に変えてしまう能力を持つのが君の現実さ、特に君のシヤスマは強大かつ目覚めたばかりで不安定、次いつまたこんなことになるか…」

榊原が祐一を見下ろしながら言葉をつむぐ。

「僕がシヤスマを探しているのは世界を安定させる以外に能力の暴走が起こりこんな事にならないようにするためでもある、そして詳細は不明だけどこの男の様にシヤスマを狙う者達もいる、これが意味するのは君達は常に危険に晒されているということ…」

次第に榊原の口調が鋭くなる、まるで別人のようだ。

「…どうすればいい」

再び力なく祐一は呟く。

「どうすれば…」

「僕に協力してくれるなら能力の制御方を教えてあげるよ、だけど

…」

榊原の掌に水が現れ渦を巻いていく。

「それが無理なら今ここで君には消えて貰う、あれほど巨大なシャスマは野放しにできないし消耗仕切った今の君ぐらい消すのは簡単だからね」

榊原の意志を具現化するように水が勢いを増していき耳障りな音を立てる。本能で判るこの男は本気なのだと。

「これが最後だ、どうする相沢祐一」

「……………」

一瞬沈黙して祐一は答えた。

「わかった」

火具楽を支えに祐一は立ち上がる。

「協力してやる、その代わり戦い方も教える自分の身ぐらい自分で守ってやる、他のヤツは誰も巻き込まない！！」

先程までと違い力強く答える。迷いを振り切り決意する。

「そうか」

榊原が片手を挙げて指を鳴らすと空気が弾け周りが元いた住宅街に切り替わる。

そして榊原はニット帽の男を地面に降ろすと恭しく一礼し。

「ようこそ、僕達の世界へ」

そう告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9080/>

世界の表裏 BLACK or WHITE

2010年10月23日07時59分発行